連載　中国絵はがきコレクション紹介 ⑨　非文字資料研究センター所蔵

戦前中国の風俗絵はがきの世界　（近藤恒弘氏　寄贈）

満洲国に於ける農民の生活　其二

孫 安石（非文字資料研究センター　研究員）

図1　滿洲國に於ける農民の生活　其二

ここでも『非文字資料研究センター News Letter 第45号』に引き続き『満洲農業図誌』の記述を参考にしながら絵葉書の解説を続ける。（　）の中の数字は同書の頁数を示す。

まず、同書は、満洲の在来農業の基本的状況として、以下の6点を指摘している（4頁）。

（1）満洲農業の歴史は新しく、中国の農業が満洲に進出したのは、明朝の初期であった。

（2）満洲は主として牧畜地帯であり、その開墾を可能にしたのは、馬の力を借りることによるものであった。

（3）満洲の土壌は華北地区の土壌に比べれば、「有機質に乏しく粘着力が強大」で、農耕作業に際しては、北支に比べて比較にならないほど強大な抵抗力に妨げられた。

（4）満洲の作物生育期間は4月から10月の7ヶ月のみで、一年一作に限られる。

（5）農地の配分は全満洲の平均で、自作地が45%で、小作地が54%以上を占める極めて不均等なものである。

（6）土地の経営面積が大きいが、農業技術は遅れ、農業労働者が極めて多い。

これらの指摘は、戦前の満洲地域の農業を理解するための重要な事項であるように思われるので、ここに再掲しておく。

満洲農産物の大宗をなすものは、言うまでもなく大豆で、その栽培は満洲全域に広く分布する。大豆は蛋白質が豊富で大量の脂肪を含み、米穀類の主食をとる食事の場合、大豆の摂取は栄養の均衡面で極めて有益であると言われる。満洲では、大豆は搾油の原料として用いられるだけではなく、味噌、醤油、豆腐などに加工される。また、搾油した大豆の粕は肥料として使われ、脱穀の際できる茎の破片は、柔らかい部分は羊の飼料として、硬い部分は燃料として利用されるため大豆のほぼすべての部分が活用されると言ってもよい。

図2　西瓜畑の手入れ　晝食も簡単に

図3　市場へ急ぐ農民達

図4　農民の共同作業　大豆の苅入れ

図４は大豆を収穫する場面を写したもので、大豆はその場で刈り取られ、乾燥させる。乾燥した大豆は大車に集められ、脱穀場に運搬される。奥に見える馬車は、そのために用意された大車だろう。

満洲の家で飼育される家畜は馬、豚、鵝鳥が一般的であった。鵝鳥は外来者にむけて無遠慮に警戒する叫び声をはりあげることから家の警備用として飼われたという（167 頁）。また、豚の飼育は日本のように特別に飼育小屋に入れることは少なく、家の近所、畑の中、その他に放って餌をとらせることが多い。豚追いの少年は「豚官児」といい、貧農の子弟が年傭いとして雇われる（図7）。

満洲では部落と部落の間をつなぐ整備された道路は殆ど無く、畑の中を車や人が通るので自然に道らしいものが作られることになる。そこに、一度大雨が降ると泥土になり、平原のゆえに排水も緩慢で、人馬の交通も極めて不便となる（144 頁）。また、満洲は冬期に乾燥するので、飲用水を確保することも容易ではない。満洲の風景を写す多くの絵葉書が井戸の水汲みを収めているのは、満洲の農民の生活の重要な部分を的確に把握していたからにほかならない。井戸には人が汲み上げるもの、馬に曳かせるもの、その両方を兼用するものなど様々なものがある（146 頁、図 9、図 10）。

満洲での農家の生活の営みは基本的に部落であり、家

図5　小供の羊毛洒し

図6　水を浴びる放牛

図7　豚の放牧

図8　渾河より砂を運ぶ

図9　水を上ぐる目隠の驢馬

図10　轆轤式で水を汲み

を中心に行われる。部落には共同の自衛の手段があり、共同使用の井戸もあれば、脱穀場、採草地、放牧場、共同の墓地なども設けられている（143 頁）。

裕福な農家の家屋は瓦葺き屋根になったり、煉瓦造りになるが、簡単な家は木材と土塊があればできる。この土塊を土甓といい、沼地から泥土を取り木製の枠に詰め、適宜、草を混ぜて日光で乾燥させれば一日に 300 個～400 個製作することができたという（図 12）。

図 11 の後ろに見える家は、草葺きで中庭には複数の水瓶が見える。とくに、水瓶は炊事の残滓を入れて、豚に与えたり、漬物を作ったり用途は非常に多かった。家の前面に見える土の塔は暖を取る土炕（オンドル）の煙突である。

玉蜀黍はもともと熱帯原産の作物で、大量の光熱を要することから満洲の南部あたりの栽培面積が多いとされる。その実は食糧となる他に飼料となり、酒造の原料となり、茎なども燃料になる点、高粱と同じである。

図 13 は、玉蜀黍の風選（種の選別）の場面を写している。粟などの小粒の穀物の選別には篩子（ふるい）が使われるが、男性が手にしている物は「簸箕」で、日本の箕に当たる。

戦前の日本では満洲といえば、馬賊と共に連想されるほど親しみのある郷土的な色彩を持つ作物が高粱である。高粱は気候に対する適応性もよく、乾燥に強い関係で満洲には最も適した作物であると言われる。しかし、その生産地は南から北に進むにつれて減少し、北満北部地帯ではほぼ栽培されないという。高粱の実は食糧にする他、お酒の醸造用として、また飼料として用いられ、茎は暖房用として重宝される。また、建築用の素材やアンペラ原料としても利用されるからその用途は極めて広い（54 頁）。

図 14 は高粱を刈り取り、互いを立て掛け乾燥させる場面を写している。この後は、脱穀場に集められ、木製の木叉子（フォーク）で上下の反転を繰り返し、脱粒を促進させ、風選をすれば脱穀は完了する。

満洲の農耕は一般的に、1 施肥、2 整地、3 播種、4 除草、5 中耕培土、6 収穫、7 収穫物運搬、8 脱穀調製の流れで行われるが、除草と収穫の作業以外はすべて役畜の力を借りることになる（6 頁）。

その農耕作業で最も重要な耕墾農具は、犁仗（lí zhàng）で、其の種類は開墾犁、種犁、蹚犁、小耕犁の四つに分けられるが、その構造はいずれも同じで、その大きさと用途で区別されたという。開墾犁（または大犁とも言う）は、土地の開墾の時に使用するもので犁体

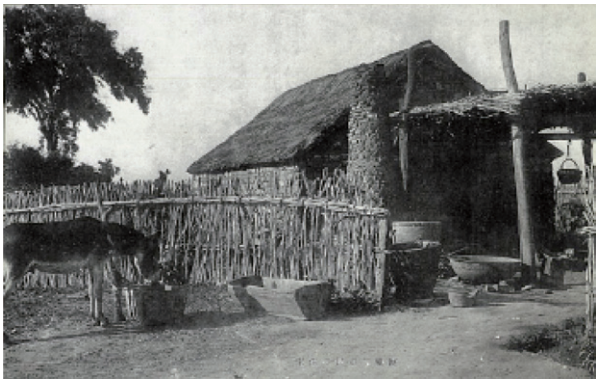

図11　簡粗な農民の住家

図12　支那煉瓦（黒）製造所

図13　玉蜀黍の風選

図14　丈餘の高粱苅取らる

が大きく全体の構造も堅硬で、種犁（反犁とも言う）は一般熟地に使用されるもので、開墾犁よりやや小さいという。図 15 は前を行く農民が播種していることから、後ろの農民が使うのは種犁のように見える。

満洲農業の播種期は 4 月から 5 月で、この頃は雨も少なく、一般に乾燥する。そこで種子を撒き、土を被せた上を鎮圧し、土の中の水分の保有を図り、一方では蒙古風によって種子が吹き飛ばされることを防ぐ必要がある。そのため、木で作った「木頭輥子」、または石で作った「石頭輥子」を牛や馬に曳かせて、土を固める「鎮圧」作業を行う。図 16 は、「木頭輥子」を使う典型的な農作業であるといえる。馬から牛へ、牛から驢馬へ、驢馬から人力へと移れば、能率は低下する。

図15　収穫を思ひ浮かべつゝにこやかに種を蒔く老人

図16　畑にローラを引く驢馬

図17　一家出揃ひ畑の手入